

研究雑誌 (25)

フランスの障害者教育・福祉事情 (九) 小学校に養護学校の教室付設、統合教育の一つの形態

藤井力夫

今回はフランスの養護学校における教育組織の編成原理、生活の基礎として「小舎制」、これに基づく学級編成の実際についてお話ししました。それは同年齢、あるいは異年齢だが同レベルの小集団、そんな編成ではない。生活を切り開く少し大きめの「家族」のような集団。年長、年少、男、女。動作の速い子、遅い子。内向きな子、快活な子。さまざまな子どもがいて、自分たちのテンポで行動する。そんな集団が志向されている。そう言っていると思います。健常児との統合教育もこんな学級の生活の一コマとして展開できること。学級編成の段階からこれが企図されます。今回はこのあたりの実情をお話ししましょう。

それについてもテンポがバラバラでは何もできません。速い子も遅い子もいるが一つのまとまりがある。各自が自分のテンポで行動し易いまとまり。学級編成ではとても大事。図は、各クラス構成員の動作優先テンポ、調査結果。知能検査とは別の実態。普通に歩いてもらった時のその子の速さ。どうしてもそうなってしまう速さ。速い子どもから順にプロットした(意義等については「生理」で予定)。表は、各クラスの統合教育の実際。それぞれの特徴を活かして展開。ここではクラスBについて述べる。動作テンポは図中、□。クラス平均は毎分一三〇、標準偏差七。速い子どもの毎分一四〇から遅い子どもの毎分一一七まで、S

字型の安定した学級編成。学校内で最も安定。クラスBの教室は養護学校から車で一〇分程度の小学校の中にあります。特殊学級は廃止され、代わって養護学校が教室を付設しました。養護学校は私立、小学校は公立。が、養護学校小中部は文部省所管、実施にやら問題はありません。朝来ると一時間目、読み書きのでき始めている子どもは小学校一年生(CP)の教室に行つて勉強します。同一教材による授業とは限らないので、各自の課題が与えられます。子どもはその日のノートを持ち帰り、喜んで二人の先生に見せます。送り出す時もそうですが、丁度、家庭から塾にやるようなかんじです。そうした子どもは二、三人ですが、他の子どもたちも誇りに感じています。教室は普通教室ですが、コーナーにソファの工夫がしてあり、ここで物語を聞いたり、男の先生のギターにあわせて歌ったりして過ごします。絵を描いたり、字を書くときは自分の机。養護学校の言語治療や心理運動の授業を受けに行く子どももいます。移動には学校からのおやつ運びの車の帰りの便が利用されたりします。

休み時間はみんなで校庭で遊びます。ボール遊び、追いかけてっこや日向ごっこ。

図. 学級構成員の動作リズム優先テンポ (I.M.P. de BEAUVAIS, 1985-86)

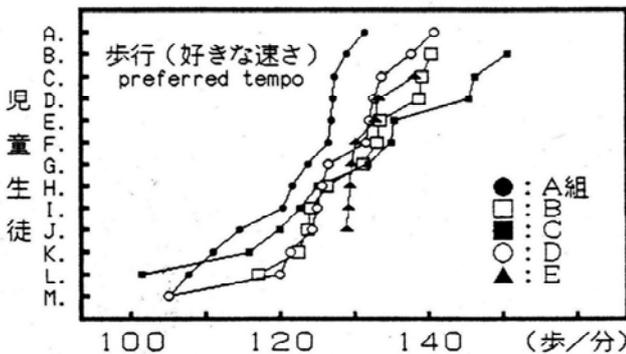


表. 各クラスにおける統合教育の実際

クラスA:	水曜日、午前中、園村小、小なり、小分、校ま、自
クラスB:	普通小、午後、は、園、水、日、午、前、中、園、村、小、小なり、小分、校ま、自
クラスC:	水曜日、午後、前、中、園、村、小、小なり、小分、校ま、自
クラスD:	水曜日、午後、前、中、園、村、小、小なり、小分、校ま、自
クラスE:	水曜日、午後、前、中、園、村、小、小なり、小分、校ま、自

こ。どこにもあるフランスの小学校の休み時間の光景。木曜日の午後三時から四〇分、小学三年生(CE2)のクラスとの合同体育です。指導は小学校の校長先生が担当。二人の担任も子どもたちのなかに参加。小学生も汗だくです。バスケット・ボールやドッチ・ボールなど。ゲームとして好都合、多く採用されます。他に、火曜日の午後一時三〇分から四〇分、小学校の音楽専科の先生によるリズムの勉強。パチや打楽器を使った身体表現といつていい内容。与えられた簡単なリズム、たとえば「タ、タ」なら、「タン、タ」など自分で変化を加えて打ち返す。担任教師二人も参加。養護学校の子どもが小学校に来て、音楽専科の先生から授業を受ける。子どもたちには大きな誇りです。

(北海道教育大学教授)